

日本國天皇家論

2章 法隆寺

法隆寺は日本國天皇家の菩提寺

移築された寺、「法隆寺」

法隆寺は飛鳥時代の姿を現在に伝える世界最古の木造建築として広く知られています。その創建の由来は「金堂」の東の間に安置されている「薬師如来像」の光背銘や「法隆寺伽藍縁起并流記資財帳」(747)の縁起文によって知ることができます。それによりますと、用明天皇が自らのご病気の平癒を祈って寺と仏像を造る事を誓願されましたが、その実現をみないままに崩御されたといひます。そこで推古天皇と聖徳太子が用明天皇のご遺志を継いで、推古15年(607)に寺とその本尊「薬師如来」を造られたのが、この法隆寺(斑鳩寺とも呼ばれています)であると伝えています。

(「法隆寺畧縁起」 聖徳宗総本山 法隆寺)

世界最古の木造建築、日本の誇る世界遺産である「法隆寺」である。だが、現在の「法隆寺」は「縁起」が伝える最初の「法隆寺」ではない。

日本書紀

天智九年(670)四月三十日に、夜半之後(あかつき)に、法隆寺に災けり。一屋も餘(あま)ること無し。大雨ふり、雷震(な)る。

670年4月30日、夏の火災で「法隆寺」は全焼。このように日本書紀は記録している。この記録は日本書紀だけではない。同じ記事が「聖徳太子伝補闕記」にもある。

庚午年四月三十日夜半、有災斑鳩寺

ここでは寺の名は「斑鳩寺」である。日本書紀では「法隆寺」で、「聖徳太子伝」では「斑鳩寺」であるが、同じ寺である。寺の法号は「法隆寺」、その土地が斑鳩だったので「斑鳩寺」と呼ばれた。「法隆寺」、又の名「斑鳩寺」は、670年4月30日に全焼してした。この寺はその前年にも火災の記事が日本書紀に見える。

天智八年十二月、時に、斑鳩寺災けり。

この記事は天智九年の重複記事であろうか。それとも、この時は軽度の火事だったのであろうか。

若草伽藍が焼失した法隆寺

全焼した「法隆寺」が、現在の「法隆寺」の南東の角で発掘された。「法隆寺」の水道鉄管工敷設工事が行われた際、焼土焼灰や焼瓦が出土したのである。

金堂の東伝廊の南にある層、焼けたと思われる層あり。

経蔵前、鐘楼前焼土層鮮明、約一尺四

この「若草伽藍」が日本書紀が「全焼した」と記した「法隆寺」である。発掘された「若草伽藍」は「中門」・「塔」

「金堂」が南北に直線に並ぶ伽藍配置であった。日本書紀と「聖徳太子伝補闕記」の「法隆寺」火災記事が正確だったことが証明された訳である。

「法隆寺」は、607年、「東宮聖王」によって、「斑鳩宮」の西南に建てられた。寺は「中門」「塔」「金堂」が南北に直線に並ぶ四天王寺と同じ伽藍配置であった。本尊は「池邊天皇」の病氣平癒を祈願して作られた「薬師佛」と伝わる。その法隆寺は、「近江京」に遷都の後、全焼した。

現在の「法隆寺」は再建された寺である

「法隆寺」は飛鳥時代の姿を現在に伝える世界最古の木造建築として広く知られている。その創建由来は金堂の東の間に安置されている「薬師如来像」の光背銘や「法隆寺伽藍縁起并流記資財帳」(747)の「縁起文」に伝わる。それによると、「池邊大宮治天下天皇」が自らのご病氣の平癒を祈って、寺と仏像を造ることを誓願された。しかし、その実現をみないままに崩御された。そこで、「小治田大宮治天下大王天皇」及び、「東宮聖王」が「池邊天皇」の遺志を継いで、推古15年(607)に寺と、本尊「薬師如来」を造った。その寺が「法隆寺(斑鳩寺)」である。しかし、その「法隆寺」は、670年の火災によって全焼した。その寺跡が「若草伽藍」である。

現在の「法隆寺」はその後、再建されたものであるということになる。

法隆寺五重塔の中心柱の伐採年は594年と断定



**五重塔中心柱は594年に伐採。
五重塔は移築されたものである。**

「法隆寺」は再建されて、現在に伝わる。だが、再建はどのように行われたのか。最新の科学調査の報告から検討してみよう。

平成13年、奈良文化財研究所は「[法隆寺五重塔](#)」の中心柱の伐採年は西暦594年と断定できると発表した。

「法隆寺」が完全焼失したのは670年である。その後、「五重塔」を再建したのであれば、伐採年は670年以降となる。ところが、今立っている「法隆寺五重塔」の中心柱の伐採年は594年だったということが判明した。

「法隆寺五重塔」は670年の焼失以前に既に建立されていた五重塔であることがことが明らかになったのである。

現在の「法隆寺五重塔」は670年の大火のあとに、新しく建造されたものではない。

奈良文化財研究所の発表は法隆寺研究に激震を与えた。

最初の「法隆寺」は670年完全焼失してしまった。金堂も五重塔も中門も、全て焼失した。その寺跡が「若草伽藍」である。

現在の「法隆寺」は再建されたものである。しかし、その再建は新築ではなかった。なぜなら、五重塔の中心の柱は594年の伐採されたものだったからである。

「法隆寺五重塔」は670年の焼失以前、すでに建立されていた寺の五重塔なのである。つまり、現在の「法隆寺五重塔」は、670年の焼失後にどこからか「移築」されたものである。

奈良文化財研究所の研究はこのような結論に導く。

法隆寺は再建された寺である。だが、新築されたのではない。他の寺を移築したものである。

- (1) 法隆寺は670年に完全焼失した。金堂、五重塔、中門全てが焼失した。それは「若草伽藍」が実証する。
- (2) 現在の「法隆寺」は再建された寺である。
- (3) 現在の「法隆寺五重塔」の中心柱は594年伐採である。つまり、今の五重塔は焼失後に「新築」されたのではなく、594年に伐採された木材で他所に建築されていた五重塔を「移築」したものである。その時、移築されたのは「五重塔」だけではない。「金堂」も「中門」も「回廊」も移築されて、現在の「法隆寺」伽藍となった。

現在の「法隆寺」は再建された寺である。だが、新築して再建されたのではない。594年の後、別の場所に建てられていた寺の「金堂」「五重塔」「中門」「回廊」を斑鳩の地に移築して、「法隆寺」として再興したのである。

回廊

再建「法隆寺」は新築ではないということは、「回廊」の柱によって容易に確かめることができる。中庭に面して立つ「回廊」の柱は全部で61本ある。そのうち、47本には梁の孔が残り、木材で埋められている。残り14本の柱にはその孔はない。47本の柱は明らかに古く、創建当時のものであろう。梁孔のない柱は移築の際、古い柱を廃棄して新しい柱を作ったのであろう。





中門と回廊



また、「中門」と「回廊」の継ぎ具合にも移築時に生じたと思われる不具合がある。ここも、素人の私が見ても、元々このように「中門」の屋根が「回廊」の屋根瓦に重なっていたとは思えない。「中門」の屋根と「回廊」の屋根が接している。

元の「中門」の基壇が更に高かったか、「回廊」の屋根がもっと低かったか、どちらかであろう。移築の時に手違いが生じた。軒と屋根が接するとは、宮大工の仕事としては考えられない不手際が見られる。

法隆寺伽藍配置の違和感

法隆寺西院伽藍を参拝するには、南大門をくぐって、長い石畳を北に進み、中門まで行く。そこから西に回廊に沿って進み、回廊の西南の角から入る。入り口としては奇妙であるが、そのような進路を歩むことによって、私たちは、先ず、五重塔を見て、次に金堂を見る。従って、それほど、法隆寺西院伽藍配置に“違和感”を感じない。

しかし、もし、現在のような“不自然な参拝経路”をとらずに、本来の寺院参拝経路である「南大門」―「中門」を通して境内に入れば、おそらく、参拝者はある種の違和感を持つのではなかろうか。



では、本来の入り口である「中門」から伽藍配置をみてみよう。写真は「中門」から撮ったものである。どうでしょうか。本来の参拝経路である「中門」から入ると、このように伽藍が見える。

五重塔も金堂もこちらが正面であるが、違和感の原因はセンターラインの不在にある。「中門」を入ると、中心線上には「大講堂」が位置する。「中門」から手を合わせるに視線は遠くに延び、仏舎利塔と金堂を通り過ぎる。故、落ち着かない。東に「金堂」、西に「五重塔」という伽藍配置が原因である。

また、寺側の説明書によると、「大講堂」は平安時代の建築である。元々、「講堂」は寺の本質的な建物ではない。飛鳥で発掘された「法興寺」の伽藍配置においても、「講堂」は「回廊」の外に存在する。「法隆寺」は当初は「金堂」と「五重塔」だけだったということになる。現在の「大講堂」がないと想像すれば、「中門」から入った人々の視線は定まらず拡散してしまう。異様というべき伽藍配置である。



因みに、他の寺院と比べてみよう。薬師寺は中門を入ると、左右に二つの塔、その奥に金堂がある。塔は左右に分かれるが、正面には金堂があるので、私たちの視線は本尊に向かう。

四天王寺は中門を入ると、塔、金堂と縦にならぶ。全然、問題はない。薬師寺も四天王寺も、参拝者の目線で伽藍が配置されている。しかし、法隆寺だけが左右対称になっていない。中心線がない。本来の寺の伽藍配置の理念に沿えなかった移築だったのであろう。

「法隆寺」の伽藍配置が「中門」の正面に「仏舍利塔(五重塔)」を置き、その北に「金堂(本尊)」を置くのであれば、手を合わせ、頭を垂れる先に自然に佛を拝むことができる。お寺にとって最重要は仏舍利である。仏舍利塔がお寺の中心に位置して当然である。「法隆寺」の伽藍は、「塔」と「金堂」の二つであるから、その配置は東西ではなく、南北(四天王寺様式)でなければならないように思える。

「法隆寺」は移築の際、何かの事情で、「塔」と「金堂」と「中門」と「回廊」だけを移築した。故に、「塔」と「金堂」のふたつを東西に配置したのであろう。

四天王寺伽藍配置

消失した「法隆寺」を彷彿させる古い写真がある。四天王寺境内の食堂に壁に貼ってあったこの写真は昭和20年の大阪大空襲で焼けてなくなる前の四天王寺の姿である。恐らく、焼失した「法隆寺(若草伽藍)」もこのような姿だったのではないのでしょうか。

四天王寺に参拝しましょう。南にある「中門」から入る。まず、塔の正面に祀ってある佛を拝む。そして、塔の中を左右いずれかを廻って北に出る。そこから、金堂に正面から入り、本尊佛を拝む。

寺の命である仏舍利塔に入り、「釈迦」に対面する。次に寺の理念である「本尊佛」に参拝する。寺の本質にかなった伽藍配置であると思える。

現在の四天王寺の通常の出入り口は西門となっている。西門への通路が便利であるという現代の交通事情

が理由であろう。金堂の近くの西門が通常の間であるが、塔の中に安置される位牌に参拝して、金堂に向かうことはできる。ここでは本来の参拝経路が生きている。

